

2026年3月17日(火)

老球の細道912号

青天の霹靂(へきれき)⑤

会津バスケットボール協会 室井 富仁

折しも、食道がんと闘い第2ピリオドに入る「抗がん剤入院治療」の前日は、父の12回目の命日と会津バスケット協会トップアスリート講習会5回目に当たる日であった。人生における最大の試練(今のところ)を控えて、私以上に胃がんで苦しんだ父を思いながら、最後になるかもしれないアスリート講習会をやることは幸せの一言に尽きた。毎日毎日が意味のある日であり、その都度全力を尽くして立ち向かわなければならない。バスケットボールを通して学んだことである。

翌日11月25日(火)いよいよ抗がん剤入院のスタートである。8時に家を出て病院へ入る。血液検査をしてから入院手続きをすます。今回の入院は、来年1月末の手術まで3クルーが行われる。1クルーは5泊6日である。高校、大学時代の部活動合宿を思い出せば簡単なものである。1クルーが終わり、次のクルーまでは約2週間の休養期間がある。ひょっとすると、その期間にクリニックや残ったアスリート講習会ができるかもしれない。そして、入院中にそれらの準備をすることで、病気のプレッシャーを忘れることができる。

そもそも抗がん剤治療とはどのようなものか。薬物を使ってがん細胞をやっつけたり、がんの進行を抑えたり、がんの再発や転移を防いだりする目的で行われる薬物療法である。抗がん剤は現在160種類以上があり、日進月歩でどんどん新しい薬が開発されている。最近では、2018年にノーベル医学生理学賞を受賞した本庶佑氏が開発した「免疫チェックポイント阻害剤」の「オプジーボ」と呼ばれる新しい薬が登場している。現在、術後の抗がん剤治療で私の身体にも処方されている。

利き目のある抗がん剤がたくさんできているのだが、副作用のリスクが問題になっている。テレビや本などを讀んだり、経験者の話を聞くと「副作用のせいで身体がボロボロになった」「副作用が辛くて治療をやめてしまった」という話を聞く。いづれにせよ通過しなければならない試練なので覚悟を決めて取り組むことにした。初日から担当の薬剤師さんが来て、薬の目的と副作用について、プリントにまとめられた資料で詳しく説明してくれた。

初日の午後1時30分、第1回目の抗がん剤点滴が身体につながれた。点滴1パック投入するのに2時間。それを24時間継続し、6日間行う点滴合宿である。病室は8階南病棟で4人部屋。私以外は皆「あっち痛えー、こっち痛えー」の重症患者で、私はどこも病状がない元気な患者で申し訳なかった。

初日は心配された副作用の症状がなかったが、2日目からやはりあらわれて来た。ひどかったのは「食欲不振」「気分不快」「息切れ」「便秘」だった。食べないでは増々体調を崩すと思い、食事の内容をご飯から麺に変更してもらったり、コンビニで食欲を増すものを買ってきて食べたりして、何とか3食を完食するようにした。便秘は、家康流で「出ぬならば、出るまで待とう💩」と気合を入れたがだめで、結局便秘薬に頼ってしまった。 <続>